



### 第3章

# 揺籃期

昭和17年(1942)4月～  
昭和30年(1955)

- ▼昭和17年(1942)
  - 4月 三田定則、岩手医学専門学校校長就任
  - 9月 三田定則、岩手医学専門学校理事長就任
- ▼昭和20年(1945)
  - 7月 学徒編成結成式
  - 8月 共同会館建物疎開
- ▼昭和21年(1946)
  - 4月 はじめての女子学生入学
- ▼昭和22年(1947)
  - 6月 岩手医科大学設立認可。学長・三田定則
- ▼昭和23年(1948)
  - 2月 岩手医科大学予科設置
  - 4月 岩手医科大学医学部医学科開設
- ▼昭和26年(1951)
  - 3月 財団法人岩手医科大学を学校法人岩手医科大学に改組
- ▼昭和27年(1952)
  - 2月 新制岩手医科大学設立認可。学長・藤田敏彦
- ▼昭和28年(1953)
  - 3月 岩手医科大学第1回卒業式
- ▼昭和30年(1955)
  - 6月 熊谷岱蔵、第3代学長・第4代理事長就任

## 揺籃期

昭和17年(1942)4月~昭和30年(1955)

昭和20年(1945)3月10日、盛岡に空襲があった。当局はさらなる空襲による市街地延焼を恐れ、建物疎開を命じた。疎開といっても建物を移動できるわけがない。敵機の目につきやすく「不要な」建物を破壊せよということだ。本校では、昭和13年(1938)、木造モルタル3階建ての共同会館が学生の厚生施設として完成していた。大食堂や売店、部室、会議室、同窓生のための宿泊室も備えた建物だった。当局はこれに目を付けた。早く壊せと矢のような催促だったという。教員も学生も粘りに粘ったがついに根負けして、全校生徒が総がかりで、取り壊しにかかったのが8月に入ってすぐのこと。建てて7年ほどしか経っていない立派な建物の取り壊しには1週間を要した。そして8月15日。終戦である。卒業生は多くを語らない。どんな思いで自分たちが勉強し集い食事をした場所を壊したのだろう。

大戦後の復興の槌音の中、昭和22年(1947)、岩手医科大学の設置が認可される。初代学長は台北帝国大学総長を辞して岩手医専校長に着任していた三田定則である。人格の陶冶を教育目標の第一義に掲げた。昭和23年(1948)4月、195名が入学してきた。学制の移行期だったため予科が設置され、第1学年70名、第2学年65名、第3学年60名も同時入学である。新しく医科大学としてスタートしたものの、食糧難の時代にあって夏休み延長措置などが取られることもあった。昭和28年(1953)、医科大学の1期生、医専から数えると21期生が晴れて卒業する。学生たちは平和を謳歌し

ながら、「医療人たる前に、誠の人間たれ」の学是のもと、全人的医学教育によって地域医療の担い手として巣立っていく。

昭和21年(1946)、医専の17期生入学式には4名の女子学生の姿があった。本学が本格的に共学となったはじまりである。実は、およそ半世紀前、医学講習所時代に、医者を目指して俊次郎のもとに寄寓していた志賀ミエ氏が男子学生に交じって机を並べていた。明治34年(1901)、本学女子学生第1号だった。戦後女子学生数は次第に増え、開かれた大学としての芽が枝葉を伸ばしていく。

昭和22年(1947)、岩手医科大学教職員組合が設置され、従業員就業規則が施行されるなど、新しい病院と新しい大学の設備・組織が整えられていった。

昭和25年(1950)、85床の圭陵会病棟(現・西病棟)完成、翌年4号館、昭和29年(1954)、分院の2~4号館落成。病院は右肩上がりの実績を誇り、活気を取り戻していく盛岡の街並と歩調を合わせるようにして、本学の施設・設備・診療科も拡大していった。やがて第1次拡充計画に向けて中庭の古い木造病室が解体される。

この時期、総婦長として、看護部を統率し、臨床医を下支えし、大学幹部の心のよりどころだったのが今野八重女看護婦である。彼女の活躍は揺籃期に始まり、次の拡充期にも及ぶ。昭和54年(1979)、彼女が亡くなった際には附属病院葬が行われ、立派な追悼文集が残されている。今野氏のナイチンゲールとしての足跡の大きさは計り知れない。

# 戦時下の学び

時代の奔流のなかで、国を支え地域を支える医師養成は、  
平時にもまして喫緊の最重要課題だった。



医専5期卒業アルバムより。全学をあげての壮行会。写真は体操科教員・野地伊七壮行会



野地 伊七氏

昭和12年(1937)7月7日、中国盧溝橋事件勃発、日中戦争へと拡大していく。同年10月の『圭陵会・共同会会報』には「鳴海、野地両先生 勇躍応召せらる」という見出しで、体操科の両氏が召状を受けたという記事が掲載される。同会報は軍医として応召された卒業生・学徒の数を記載するが、その数は30人、50人……と年を追うごとに増加している。

銃後の盛岡では、北上川や小岩井農場などで軍事教練が行われていた。岩手医専の学生たちも盛岡歩兵連隊に入隊していく。勤労奉仕、学徒出陣と日本中が戦時色に塗りつぶされており、本校も例外ではなかった。



公会堂前広場



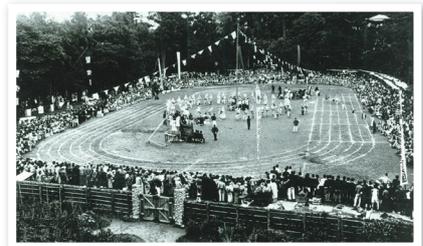
北上川での軍事教練



昭和19年(1944)11月、盛岡歩兵連隊入隊の医専学生。盛岡青山地区には明治41年(1908)弘前から工兵第8大隊が転営、翌年には陸軍騎兵第3旅団が編成。第二次世界大戦中は種々改編を繰り返しながら満州方面に動員



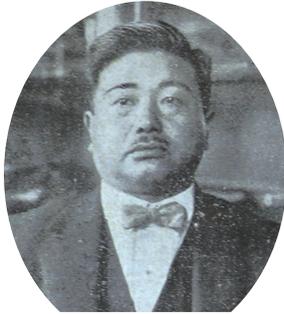
現在も青山地区に残る第23連隊司令部営門。同地区には覆馬場1棟も残る



運動会は岩手公園に会場を移し戦時中も行われていた

# 戦禍を越えて

## 戦地に教え子を送り出した教授の苦悩



内山 泰

戦時中、本学は戦地に卒業生や繰り上げ卒業の学徒を派遣し続けた。

本学附属図書館には昭和26年(1951)12月刊行の『泰巖餘光』という小冊子<sup>たいがんよこう</sup>が収蔵されている。内山泰病理学講座教授の追悼文集である。内山泰氏は、明治28年(1895)新潟生まれ、東北帝国大学医学部卒業後、同病理解剖学教室勤務を

経て、昭和11年(1936)岩手医専に着任。昭和19年(1944)7月、胃がんのため死去する。七回忌に編纂された『泰巖餘光』には、死の2か月前、5月26日に病苦を押し立てられた講義録や、昭和18年(1943)7月16日付の戦地の教え子に出された書簡などが掲載されている。

### 『泰巖餘光』より

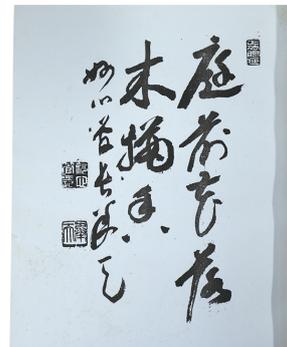
#### 「最後の講義録」

(静かに立ち、チョークを握り大きく一期一会と書かる)

茶道に一期一会という詞がある。(中略)昭和十九年五月二十六日午後二時半、この時は今や過ぎ去つて、再び帰ることのないものである。再び廻り来ることのこの宇宙の上に断じてないと意識するのが一期一会の覚悟である故に、如何なることにも些かの緩みもなく発揚されたる全心全霊を尊ぶ心である。我輩自身、今教壇に立ちて諸子と相会しつゝ一期一会の感の油然として胸中に満して来るのを感じるのである。凡そ学究の徒にとつて最も大切なのはこの覚悟である。一刹那は既に過去であり、死の世界である。又一刹那は未来であり、未知の世界である。

「ガタルカナルに、アツに、キスカに教え子を送った今となり」という書き出しの「7月16日付書簡」

医道本然の姿に立ち返らしむるには、医人各人の教養、品位を高めなくてはならぬ事とくやく存じ申候。しかして已に大戦で医師が軍医として、官医となりたるこの機こそ、銃後も官医としての素質向上に努力せざるべからずと平素からの素懐を強く感じたる次第なり。

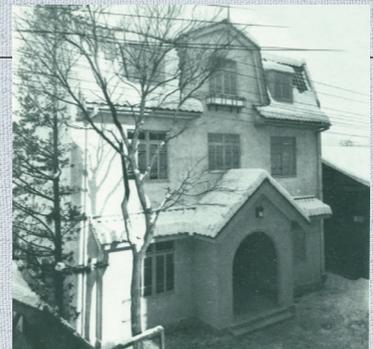


内山泰氏の書も掲載する『泰巖餘光』。氏は禅学を学び、参禅会を主催するなどしており、漢学の素養もあった

### 共同会館建物疎開

昭和13年(1938)に学生の福利厚生のために苦心惨憺して建設された木造モルタル3階建ての共同会館では、食糧難から昭和17年(1942)に食堂が閉鎖された。下宿先に困る学生も出てきたので新生20数名のために「不來方寮」として利用されるようになる。

昭和20年(1945)3月10日、B29による空襲が盛岡にあり、駅前一带が消失。これを受けて、当局は木造家屋を強制取り壊すように命じた。共同会館も取り壊すように言われたが、学校側は必死で抵抗する。ついに8月に入り、取り壊すことを決める。1週間かけて在学生総動員で取り壊した。それから1週間もしないうちに終戦の日を迎える。



医専15期生庄司三郎氏によると、会館の玄関に掛ける看板を三田定則に揮毫してもらったところ、「コレデエガンスカ、勉強ステヤンスカ」とおっしゃったという(『あゝ生々の徳のあと 岩手医科大学陸陵会五十年年史』より)

# 軍医として応召した卒業生の戦地での辛苦

## 戦死者を悼む

本学同窓会は昭和7年(1932)に「刀圭」(薬を盛るさじのこと。医術を意味する)の「圭」と盛岡(杜陵)の「陵」の文字をとって「圭陵会」と命名されていた。圭陵会名簿を繰ると、この時期の卒業生には戦地名と戦死の文字が多い。

戦時下にはどこの組織も「報国」の信念で活動していたが、本学『共同

会々報』が『報国会会報』と名を変え、『圭陵会会報報国会会報』として刊行され、戦地便りや同窓生の戦死・戦病死を報じた。名簿や会報に報告されない死もあっただろう。今回可能な限り博捜し、昭和期の戦死者・戦病死者のリストを作成した(091ページ)。判明している限りでは総計154名にのぼる。

## 戦死した卒業生の方々

区分	卒業年	
第1期生	昭和7年(1932)	9
第2期生	昭和8年(1933)	12
第3期生	昭和9年(1934)	5
第4期生	昭和10年(1935)	12
第5期生	昭和11年(1936)	10
第6期生	昭和12年(1937)	16
第7期生	昭和13年(1938)	13
第8期生	昭和14年(1939)	11
第9期生	昭和15年(1940)	8
第10期生	昭和16年(1941)	8
第11期生	昭和17年(1942)	20
第12期生	昭和18年(1943)	18
第13期生	昭和19年(1944)	10
第14期生	昭和20年(1945)	2

(名)

## チャンギ刑務所に散った鴨居 義弘氏

柔道部の部誌『柔圭会報』第10号(平成10年<1998>)には、昭和21年(1946)9月11日、戦犯としてシンガポールの捕虜収容所チャンギ刑務所で法務死させられた医専5期鴨居義弘氏

の遺書(妻美代子氏宛)が、昭和54年(1979)『柔圭会報』より転載されている。鴨居氏は、香川県出身。陸軍大尉軍医として応召。



チャンギ刑務所

## 遺書

いよいよ近日中に死刑と確定した。生前何等なす事なく心配ばかりかけて報いる事が出来なかった事申すまいけれど前世からの約束事とあきらめてくれ。不肖の夫として又不肖の父として持った事を不幸とと思ってくれ。俺は死を恐れてもおらん。又生き永らへてもお前達を幸福に出来たかどうか分からぬ人間であったけれど、こんな所でこんな事で死ぬのは本望でない。しかし考えようだ。皇国敗戦の捨石となるも、犬死するも軍人として仕方なし。何と云われようと何と新聞に発表されようと部隊の為部下の為と考えてやった事が原因になったのだ、天上天下恥じる事なし。どうか子供の教育だけは充分してやってくれ。不肖の父でも子だけは立派にしてくれ。俺の父としての務めがすんで居らるので生残ったお前へのむ。皆によるしく。子供をたのむ。幸福に暮らしてくれ。無理かもしれないがシンガポールの地より必ず必ず守っている。

浅田次郎氏は「岩手医科大学創立八十周年記念誌 思源」(平成20年(2008)、巻頭に「醫の一字」をご寄稿の上、八十周年記念講演会でもご講演いただいた



浅田 次郎氏  
(c)山下みどり

## 浅田次郎『終わらざる夏』(平成22年(2010)、集英社)より

### 上巻 第一章より

「岩手医専の現状は惨憺たるものです。たぶん全国の医専はみな同じだと思いますけれど、卒業を半年繰り上げて医師免許を取得させ、片っ端から軍隊に引っ張っているのです。私も同様ですが、臨床経験などほとんどないに等しい。静脈ひとつとるにたところで看護婦よりもへたくそな若い医者です。岩手県下の病院や、僻村の診療所に勤務する医師たちも、根こそぎ動員されています。面積が広くて、ただでさえ医療の行き渡らぬ岩手県は、今や無医村だらけになっているのです。医専は、将来の地域医療を保持するために、他県の官立大学の本科に卒業生を避難させています。私もそのひとりなのです。しかし軍隊は

追ってきます。帝大本科の学生にはちがいないが、すでに医専を卒業して医師免許を持っているという理由で、私にだけ令状が来ました。これを、偏見だとは思いませんか」

### 下巻 第七章より

「医専病院は常時百名以上の医師を擁する、県下随一の大病院である。外科医から始まった動員は、翌年の春にはくまなく全診療科目に及んだ。やがて学生の就業期間も短縮され、繰り上げ卒業したとたんに召集されるとい、事実上の軍医養成学校に変わってしまった。」



# 岩手医科大学設立認可

岩手医学専門学校から岩手医科大学への昇格を果たす。

昭和21年(1946)7月26日、岩手医科大学設立を文部省に申請し、翌年6月18日付で認可された。初代学長は、昭和17年(1942)、第2代岩手医学専門学校長になっていた三田定則である。

三田俊次郎は早くから三田定則(明治9年<1876>盛岡生まれ)を後継者にと考えていた。定則は、三田医学奨励会の奨学金受給者第1号として、東京帝国大学に入学。医学部卒業後、法医学講座血清学教室教授

を経て昭和11年(1936)2月、台北帝国大学医学部長、翌年9月、総長となった。昭和17年(1942)、俊次郎の招きで本学に着任。戦後の大学昇格は定則の存在によるところが大きい。昭和22年(1947)、昭和天皇が来県した折に、陛下の希望で投宿先の小岩井農場岩崎別荘に呼ばれ歓談。戦後の混乱を乗り切るために大学は人格の陶冶が優先されるべきであるという自説を開陳したという。昭和25年(1950)逝去。享年74歳。



三田 定則初代学長



三田定則学長と和田安民事務局長(昭和23年<1948>1月1号館玄関前)



ちんべいつ 陳培哲氏所蔵の『国立台湾大学校史稿』。三田定則が、昭和11年(1936)3月に東京帝国大学から台北帝国大学医学部長に転任し、9月に同第2代総長に就任、昭和16年(1941)4月に退職したことを記載する。森鷗外の長男森於菟(明治23年<1890>~昭和42年<1967>)は、東京帝大時代の定則の弟子で、定則のすすめで台北帝国大学に赴任、その後解剖学講座教授を務めた

## 定則の教育理念

組合雑誌「蒼穹」創刊号、第2号

三田 定則「蒼穹へ寄す」(組合雑誌「蒼穹」創刊号、昭和24年<1949>3月)より

人間は動物と違って理想に生きなければならず、而してこの理想の実現には、動的のものと、静的のものと二つある様に思われる。(中略)

人としてこの世に生を享けた人類は、必ずや時計の針の絶え間なく動くが如く、体的並に心的に上にと進化発達する様努力するのが人類精神であつて又日本精神に外なら

ぬものである。(中略)

次に人類として抱いておらなければならぬ所の静的の大理想とは、どんな事であるかというに、誠に徹底して互に相愛し互に相敬し以て天分を尽すことこれである。



「わが三田 定則先生—そのプロフィール—」(圭陵会三田定則先生顕彰実行委員会、昭和47年<1972>6月)より

「エックへの挑戦」(医専16期生・吉田 大三氏)

「勉強しあんせ」(医大1期生・長野 政行氏)

定則先生の印象は、とほうもなくスケールの大きい教育者、といった感じだった。というのは、当時の戦時カリキュラムに迎合しない教育理念をおし通した毅然たる態度に、われわれ学生達は威圧されるものをおぼえていたからである。(中略)

人間倫理では「至誠」ということをおそわった。盛岡訛りの強い定則先生は、「マコト」を「マゴド」と発音される。盛岡生まれの私には親しみさえ感じたが、それが、多くの学生達の耳には、「マゴド」がすぐに「至誠」と結びつかないので、そのつど、盛岡人が通訳?の労をとらねばならなかったのもなつかしい思い出である。

三田定則先生を学長に戴いてから、私達は始めて「学ぶ事」を知らされたといっても過言ではなからう。学生だけではない。教授も、研究員も、自分のテーマを持ち得ない者は、『勉強しあんせ』と軽くなされた。(中略)あの温顔、艶々としたお元氣なお顔、腰をかがめて小走りにすぎられる。ふと足をとめて、必ず私達にも声をかけられた。「勉強すてんスカ」と。

# 三田定則の足跡

昭和11年(1936)、台北帝国大学初代医学部長、翌年には第2代総長となる。後藤新平が台湾総督府衛生顧問となった明治29年(1896)から40年の歳月が流れていた。定則の縁で岩手医専に留学した台湾人も多く、今なおその御子孫が海を越えて来学されることがある。現在の花巻空港には、台湾からの直行便でやってくる多くの視察団や観光客を出迎えるための後藤新平や

国立台湾大学医学院  
の医学人文博物館



医学人文博物館に展示されている三田定則の肖像写真



国立台湾大学「校史館」パンフレット。旧台北帝国大学の歴代学長のページには三田定則も掲載



花巻空港ロビーに設置された「岩手の偉人」パネル

宮沢賢治のパネルに並んで三田定則のパネル写真もある。

東京大学医学部2号館の吹き抜けや法医学教室には、定則を顕彰する銅像や扁額写真がある。また、台湾大学の医学人文博物館では、「台北帝国大学医学部」と書かれた当時のプレートの脇に定則の肖像写真が展示されている。



東京大学2号館に設置された定則の銅像。制作者は、斎藤素巖(明治22年(1889)~昭和49(1974))。芸術会会員、近代彫刻の旗手として活躍



東京大学2号館。昭和2年(1927)、内田祥三設計により医学部本館として建てられた歴史的建造物

## 科学談話会発足

学究肌だった定則はことあるごとに学問を推奨した。学内外の研究者の学びの場として科学談話会設立に尽力する。昭和23年(1948)5月8日、岩手医大講堂で発会式が行われた。昭和24年(1949)9月12日には公会堂で、三田定則と田中館愛橋が科学講演会を行った。科学談話会は現在も続き、盛岡市立図書館で毎月第2金曜日に行われ、多くの本学教授が演者を務めている。



昭和24年(1949)9月開催の科学談話会講演会の集合写真。前列左から5番目が田中館愛橋。隣が三田定則。田中館愛橋(安政3年(1856)~昭和27年(1952))は、二戸出身の地球物理学者

## 定則が取り持つ縁

定則は、台北帝大の薬理学講座教授に杜聰明氏を抜擢した。杜氏は京都大学で外国籍初の博士号を取得し、アメリカでモルヒネの研究をしていた。杜氏のご子息Anthony T.Tu(杜祖健)氏は生化学者で、コロラド州立大学理学部生化学講座の教授を務め、『身のまわりの毒』(東京化学同人、昭和63年(1988))などの著書で知られる。地下鉄サリン事件では調査協力もされた。平成2年(1990)、本学薬理学講座助教授(当時)立川英一氏はアメリカでTu先生と知遇を得て、平成14年(2002)本学にTu氏をお招きした。さらに、平成28年(2016)本学口腔外科学分野からベルギーのルーベンに留学中の熊谷章子氏が、インドネシアの学会でTu氏と面識を得ている。



礼服姿の杜聰明氏



本学医学部3年生に薬理学の講義をするAnthony T.Tu氏

# 岩手医科大学の教育

敗戦によって本邦の教育制度も大きく見直された。旧制高校から新制大学への進学をサポートするために大学予科制度がしかれた。

昭和22年(1947)教育基本法が制定され、4年制を原則とする新制大学が誕生した。文部省は全国の医学専門学校を廃止することとし、大学昇格にあたっては厳しく審査した。また、旧制中学・旧制高校在学中の学生のために、大学予科を3年間設置し、大学進学前教育を行った。本学では昭和22年(1947)に医専最後の20期生が入学してい

た。移行措置として、旧制中学4年を終了したものが入る予科1年生と、医専や他の普通高校等から転入する予科2・3年生とを置いた。医専は5年制とし、医専の2年生が予科2年生に転入することも認めた。財団法人岩手医科大学(旧制大学)としてのスタートである。



大学に昇格した頃の教授陣。昭和24年(1949)秋、中庭食堂前にて。(前列左より)今泉亀撤、足澤三之介、羽根田貞郎、田沢芳三郎、三田定則、藤田敏彦、根本四郎、増田六之助、工藤祐三、三浦信之(中列左より)和田安民、百岡胤正、田村彰、及川正助、瀬田孝一、木村武、中屋重綱(後列左より)小暮健一郎、菅千里、桂佐元、小野一男、小原喜重郎、園田釈雄、近藤勇、二井一馬



昭和27年(1952)3月16日『岩手日報』。3月15日、岩手医大第1回卒業式と医専最後の卒業式が一緒に行われ、同時に医専の閉校式が行われたことを報じている



三田定則予科長と予科3期生。昭和23年(1948)1月、1号館玄関前(前列中央左より)百岡胤正、三田定則、和田安民



スズランをアレンジした予科の帽章

## 岩手大学との合併問題

盛岡では、昭和24年(1949)、盛岡高等農林専門学校、盛岡工業専門学校、岩手師範学校、岩手青年師範学校を統合し、農学部、工学部、学芸学部からなる総合大学として岩手大学が設置された。昭和26年(1951)学校法人に改変して新制大学としてスタートしようとしていた本学と岩手大学の合併問題が浮上する。岩手大学医学部か、私立岩手医科大学か、議論が重ねられた。

岩手大学教授会は本学との合併を決議するも、本学理事会は「私学の伝統精神で進む」方針を表明し、その路線が今なお貫かれている。

年度	昭和	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	入学者数
医学専門学校	16期	○	○	○	○									160名
	17期		○	○	○	○								160名(4)
	18期			○	○	○								160名(4)
	19期				○	○	○	○						120名(13)
予科	1年					○	○	○						70名(3)
	2年					○	○							65名
	3年					○								60名
岩手医大	1期						○	○	○	○				50名
	2期							○	○	○	○			69名
	3期								○	○	○	○		75名
	4期									○	○	○	○	83名

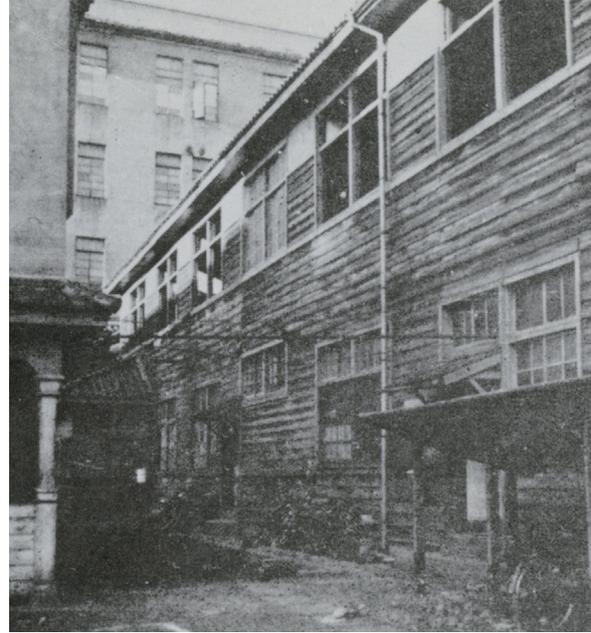
旧制大学 | 新制大学 ()は女子

予科の修学年限は最大3年間。岩手医大開学時には、A医専18期生(第3学年)、B医専19期生(第2学年)、C医専20期生(第1学年)が在学中だった。それぞれ予科3年、予科2年、予科1年に編入学し、その後新制大学へ進んだ。したがって移行期の学生は卒業までに最大で8年を要した

# 新たなる施設

いつの時代も、医学の進歩と教育改革に抜きつ抜かれつしていた本学には、病院と校舎の施設設備の建替・更新の課題がつきまとっていた。

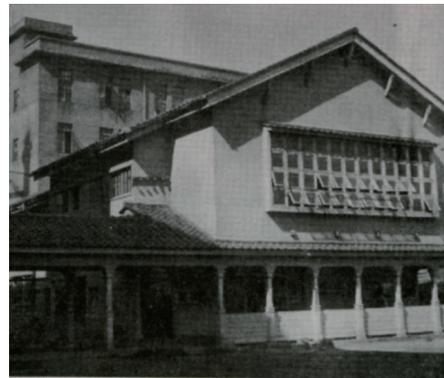
戦後の復興の槌音が響く盛岡の街に昭和25年(1950)6月10日、圭陵会病棟(西病棟)が新築される。翌年には火事で焼失していた三戸町分院が再開。その頃、中ホールができ、教職員のための炊事場と食堂が新設された。昭和30年(1955)3月18日、建物疎開により取り壊された共同会館跡地に看護婦宿舎が建つ。後に建て替えられ、「木の花会館」となった。



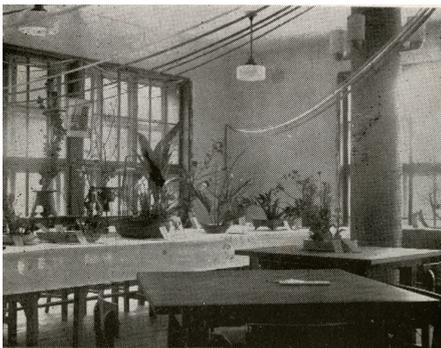
昭和22年(1947)当時の中庭の木造校舎。奥に2号館



折に触れてコンパを行った中庭に新病棟建設が決まる



現在は取り壊されている中ホール。後ろは5号館



中ホールのなかにあったと思われる食堂と炊事場。組合雑誌『蒼穹』創刊号(昭和24年(1949))に「新しくなった炊事場と食堂」と書かれる



昭和25年(1950)、学校の資金に圭陵会の寄付金を加えて新築した圭陵会病棟(西病棟)。建物疎開で取壊した共同会館の古材も使われている



共同会館跡地に建てられた看護婦宿舎

# 新制岩手医科大学発足時の教授陣

旧制大学・岩手医科大学は、昭和26年（1951）、文部省に新制大学としての設置認可申請書を提出、財団法人から学校法人へと組織を改編する。昭和27年（1952）2月20日、認可があり、同年4月1日、新制岩手医科大学が発足した。昇格に際しては講座の充実が要件だった。

## 解剖学講座



二井 一馬 教授  
植木 春三 助教授  
佐藤 文雄 助教授

## 生理学講座



藤田 敏彦 教授



三田 俊定 教授

## 細菌学講座



田沢 芳三郎 教授  
近藤 勇 助教授

## 薬理学講座



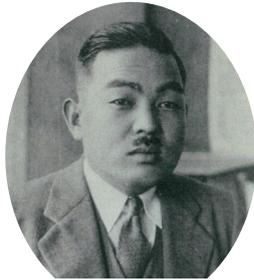
中屋 重綱 教授

## 生化学講座



小原 喜重郎 教授

## 法医学講座



黒川 広重 教授

## 内科学講座



工藤 祐三 教授  
田村 彰 助教授  
小野 一男 助教授  
木村 武 助教授

## 外科学講座



瀬田 孝一 教授  
児島 渡 助教授

## 小児科学講座



根本 四郎 教授  
和田 安民 助教授

## 耳鼻科学講座



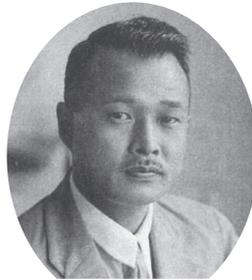
金野 巖 教授  
塩谷 裕 助教授

## 眼科学講座



今泉 亀撤 教授

## 皮膚・泌尿器科学講座



増田 六之助 教授  
三瓶 鈞 助教授

## 神経・精神科学講座



三浦 信之 教授  
小泉 四郎 助教授

## 放射線科学講座



足澤 三之介 教授

## 衛生学・公衆衛生学講座

園田 积雄 助教授

## 整形外科科学講座

栃内 巖 助教授

## 産婦人科学講座

菊池 俊雄 講師

# 新たな学生生活

新しい時代の風を受けて、6年間の医育を受けた学生たちが巣立っていった。

岩手医科大学1期生は卒業に際して同期会を「一献会」と名付けた。新しい時代の風を受けて順風満帆に船出した1期生は第14回医師国家試験に全員が合格した(当時全体の合格率は89.6%)。

昭和57年(1982)に『一献会三十周年記念誌』が出版された。誌上には新制医科大学1期生在学当時の貴重な写真が多数掲載されている。そのうちの何枚かを転載する。



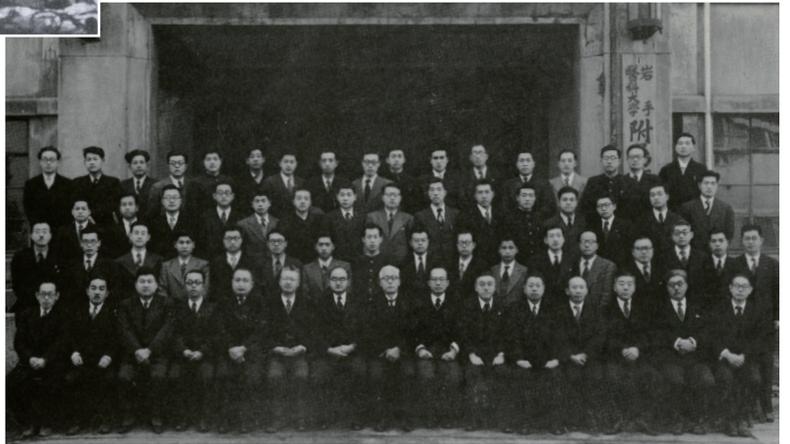
工藤祐三先生の内科講義



戦争直後の学生は、復員後に入学したり、予科や医専から編入したりと、いろいろなルートで医大に進学。前列にしゃがんでいるのが医大1期生・小西一氏<sup>はじめ</sup>



放射線科ポリクリ(左中央が足澤三之介教授)



昭和27年(1952)3月15日、医大1期生卒業式



昭和26年(1951)6月18日、岩手公園での野球大会



医大1期生の国家試験前、旅館にて。合格率は100%



国家試験後の松島観光

# 開かれた大学

本学における男女共学は、女医の育成への道にほかならない。

昭和21年(1946)、学則第3章第9条中の「男子」の箇所がペンの手書で修正され、「者」と書き込まれている。圭陵会名簿によるとこの年の入学生(医専17期生)に女子学生4人の名前を確認することができる。医専18期生として4名が入学、医専19期生には13名の女子が入学している。最後の医専20期生は40名しか入学していないがその中に1名、医大2期生に2名、医大3期生に3名の女性名を確認できる。



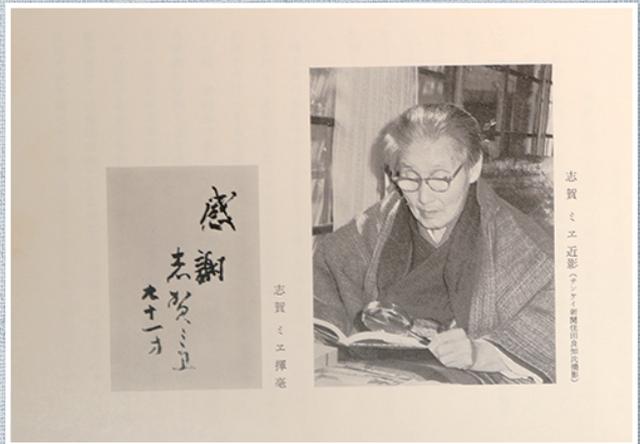
昭和24年(1949)、医専18期生と思われる白衣姿の女子学生

## 志賀 ミエ ～女子医学生第1号

私立岩手病院時代、医師を志して三田俊次郎宅に寄留していた志賀ミエ(明治18年<1885>～昭和48年<1973>、北上市金ヶ崎町出身)が男子学生に交じって机を並べていた。ミエの兄・亘わたるが三田俊次郎とともに廻生堂塾生だった縁である。結核を患っていた俊次郎の先妻・利佐の看護をしながら、俊次郎の鞆を抱えてともに登校していたという。

1年ほど岩手医学校で学んだ後、家庭の事情で上京。女子医学研修所、東京医学校(現日本医科大学)で学び、苦学の末明治45年(1912)、医術開業試験に合格。宇都宮で眼科医院を開業。開業の知らせに俊次郎は盛岡から駆けつけ、わがことのように喜んだ。志賀家は伊達藩の支藩大町家当主・大町定頼の典医志賀潔の家の縁戚。

ミエ氏の娘・美子は結婚し長男・節(元衆議院議員)を出産後、東京女子医大へ入学、昭和14年(1939)晴れて医師となるが、昭和17年(1942)、34歳で結核により他界。



志賀 ミエ  
ミエ91歳の文化の日に銀杯下賜。記念の小冊子「感謝」(ミエの娘・美子の夫・志賀健次郎が執筆)。三浦自祐家所蔵

## 志賀 ミエの教え ～志賀 かう子氏に聞く

志賀かう子氏(美子長女、昭和10年<1935>宇都宮生まれ、盛岡在住)は、ミエ氏を題材に『祖母、わたしの明治』(昭和57年<1982>12月、北上書房、エッセイストクラブ賞受賞)を上梓。それをもとに劇団文化座が平成7年(1995)「ほにほに、おなご医者」(佐々木愛主演)を初演。平成11年(1999)、盛岡市民文化ホールでも上演された。

実母を7歳で亡くしたかう子氏はミエ氏に育てられた。ミエ氏は教育こそが人間をつくるという自説をもち、「なぜ努力をしないか、勉強するときに努力しないでいつするのか」と厳し

かったという。ミエ氏の医者としてのモットーは、献身的に手抜きをせず患者を診ることで、ミエ氏の聴診には定評があり、亡くなるまで聴力は衰えなかったという。

随筆家・志賀 かう子氏



『祖母、私の明治』



「ほにほに、おなご医者」の公演チラシ

# 学問の振興

三田定則の学問第一義の精神はその言動によく表れていたが、『岩手医学雑誌』「刊行あいさつ」にその思いがにじむ。

## 岩手医学会設置

昭和22年(1947)12月、戦後の混乱期に『岩手医学雑誌』(全72ページ)が岩手医師会学術部により発行されている。昭和25年(1950)6月25日、岩手医学会会則が制定され、岩手医学会が発足。岩手県医師会が設立主体であるが、会の事務所を本学内に設置した。目的は「医学に関する科学及び技術の研究並びにこれに関する事業を行なう」ことである。初代会長は三田定則、春秋2回の学術講演会と月例会を開催し、現在に至っている。



### 三田定則「発刊に際して」 (『岩手医学雑誌』第1巻第1号、昭和22年(1947)12月より)

真理の探究に専心する時の気持は、純粹無垢にして、豪末の邪念のなき全く無我の境地に入るのであるからして、かかる事を繰り返して反復している間には、習い終には性となり真理の探究に精進した人は、知らず識らずの間に完全無欠にして有徳なる本統の聖者に化することになる。

而して若し探究する真理は、理学的方面の領域であったとすれば、かかる人は、完全無欠にして有徳なる本統の人間にして而も立派な学者であり、検索する真理は医学的部分であるならば、かかる人は、完

全無欠にして有徳なる本統の人間であると同時に堪能なる医学者として或は病者を其の苦惱より救い或は病を未然に防ぎ且つは健康を増進すると云う技能を備えたものになる。

真理の探究に精進することは、やがて、一方には高尚なる人格を養成すると同時に他方には夫々専門の優秀なる学者を創ると云う一石二鳥の効果的方策にして将来吾々としては、此の気持で再出發しなければならぬものと確信する。

## 川村賢朗氏の研究

昭和28年(1953)12月から岩手保養院に勤務した川村賢朗氏は、その後病理学講座の技官として長く本学に奉職。昭和29年(1954)10月16日の保養院火災の生き証人であり、精神科医療の変革期を体験された。氏は多くの先生方の信頼を得て、いろいろな相談に乗られたこともあった。その後、病理学講座の技能員として勤務するかたわら、法政大学(通信制)で学び、巖手醫文庫所蔵の江戸幕府第14代将軍徳川家茂の侍医伊藤玄朴の看護記録を研

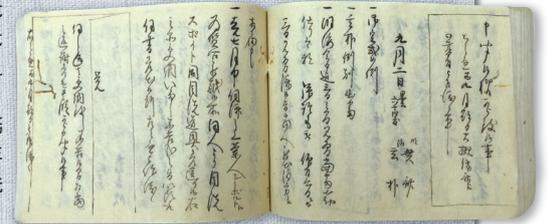
究。『圭陵会々報』第324号(平成21年(2009)9月)～第328号(同9月)に「特別寄稿一家茂の医局日記①～⑤」として研究の成果の一部を紹介している。



川村 賢朗氏



伊藤玄朴ほか御殿医らの看護記録は、小林茂雄氏(元岩手県医師会長)収集のものを御令息・小林高氏(医大19期生)が本学に御寄贈。1,000ページを超える大部なもの。万延元年(1860)～文久2年(1862)までの毎日の記録。健康状態、病状、処方などの医務記録のほか、和宮降嫁に関する記事もある。万延2年(1861)9月2日の条には、「蘭人シーボルト」の「目洗スポイト」「目洗道具」受領に関する記述がある



# 病院を支え続けた今野 八重女氏

本学列伝に欠かせない人物が何人かいるが、今野八重女氏はその筆頭だろう。  
多くの人たちが深い敬愛の念をもって彼女を語る。



大正・昭和の60余年間、5代の校長・学長に仕えた今野八重女氏は岩手医科大学の歴史の証人であり、教職員にとっての偉大な母であり、入院患者さんにとっては聖なるナイチンゲールだった。

## プロフィール

明治33年(1900) 岩手県江刺郡梁川村生  
大正7年(1918) 岩手産婆看護婦学校卒業、岩手病院看護婦に採用  
昭和4年(1929) 岩手病院看護婦長  
昭和26年(1951) 岩手医科大学附属病院総婦長  
昭和33年(1958) 退職。附属病院のハウスキーパー並びに患者相談係  
昭和35年(1960) 黄綬褒章受章  
昭和53年(1978) 永年勤続特別表彰(60年2か月)  
昭和55年(1980) 心不全のため死去(享年80歳)



『今野八重女追悼集』(昭和56年(1981))より

今野八重女追悼集

## 第5代学長 三田 俊定「慈悲深い姉上さま」

私の父を彼女は肉親と思って親愛の情を終身捧げてくださったと思います。(中略)

八重女様は必ず私の父の命日には報恩寺のお墓を清掃し、花を献ずることを習いとしておられた。命日にはいつも私の家に父の好物のあんころ餅を届けてくださった。

大正年代のことですが、盛岡市にコレラ患者発生の騒ぎがあったとき、当時の八重女様はその看護と防疫作業に率先して従事し患者の吐物を頭髪からかぶっても沈着に看護を実践したことは今でも語り草として伝えられています。

## 医専12期 赤坂 俊夫「二百三高地の後に続け『病めるを救わん仁の術』」

八重女婦長さんと言うと、やや背を丸めて、有名な二百三高地髪型、そして白衣の上にも離さない「カッポー着」、このスタイルが岩手病院、岩手医専、今日の岩手医科大学に到るまで全く変わらないスタイルであった。終戦後泌尿科医局に戻った昭和21年頃から、大学への昇格時代へのその期間は古びた病院をより美しくしようという運動が高まり、八重女婦長が独特な盛岡弁で各医局を廻って激励し、率先してペンキ塗まで手伝っていたのが忘れられない。

今のマンモス医大と違い入院患者もそれ程多くなかったが、毎日、各科の病室を廻って患者さんを慰めていた。二百三高地が来ると何となく安心したとよく入院患者さんに言われたものだ。不幸にして患者さんが死亡した場合はよく霊安室で線香の準備をしている姿をみかけたものだが、これなどは思っただけでなかなかやれるものではない。

## 医大3期 川村 隆夫「漬物の味 人の涙を教えてくれた人」

「先生、お変りながんすか」小生の在職十九年間、顔を合わせれば出てくる八重女さんの言葉である。一般的な社交的言葉とはいいいながらも、真底、暖かく感じられる何ものかがある。長年、看護婦として培われた単なる教養のみから出たものとは思われず、知らず知らずに瞬時の人との触れ合いを大切にするという、先天的なやさしい心から出たものと思われる。教授連はすべてさん呼びである。小生の瀬田外科時代は、よく教授に叱られたものである。朝会后、医局でがっくりとなっているところに、八重女さんもまた、ちょこまかとよく現れる。「胸さわぎしたので来ましたよ。ほう! やっぱり瀬田さんにやられましたね、気にしないの。あの人は昔からただおこつていればよい人なんだから」とか「よくまあ、あきずにおこるもんですね」。しばらくして重箱に自家製のお新香をもってきて「さあ! これたべて。元気だしてや」とお茶をよくいれてくれたものです。

# 戦争により亡くなった卒業生の方々

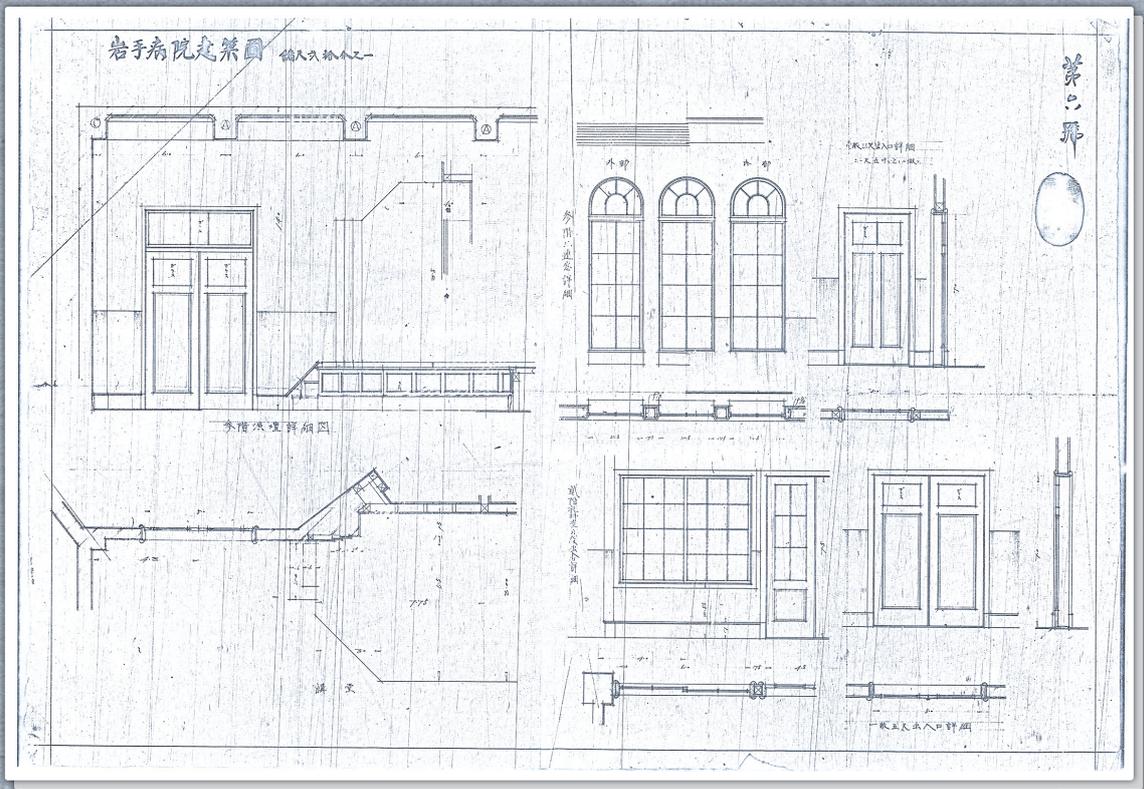
氏名	卒業年月	死亡年月日	
浅野 冲	昭和7年3月		戦病死
稲城 忠實	昭和7年3月		
内山 忠一	昭和7年3月	昭和21年	
馬田 聖司郎	昭和7年3月		
黒澤 恭治	昭和7年3月		
佐藤 正太郎	昭和7年3月		
瀬川 宏	昭和7年3月		
富田 竹雄	昭和7年3月		
森山 秀一	昭和7年3月		
江俣 武雄	昭和8年3月		
岡崎 三郎	昭和8年3月	昭和12年9月	
音喜多 兼太郎	昭和8年3月	昭和15年	
上林 敬一	昭和8年3月	昭和20年7月2日	ルソン島
坂本 三郎	昭和8年3月	昭和12年3月21日	軍医大尉 病のため内地帰還中広島にて戦病死
根本 貞雄	昭和8年3月		戦病死
橋爪 三津男	昭和8年3月	昭和18年3月	ダンピール海峡輸送船・大井丸
長谷部 一郎	昭和8年3月	昭和20年7月24日	ルソン島
半谷 重雄	昭和8年3月		
松田 吉男	昭和8年3月	昭和14年9月21日	ノモンハン
三浦 武營	昭和8年3月	昭和25年9月15日	戦病死
宮下 右門	昭和8年3月		
大越 清	昭和9年3月	昭和20年5月1日	ルソン島マウンテン州
大森 孝男	昭和9年3月	昭和20年11月7日	広島被爆死
佐藤 重雄	昭和9年3月	昭和20年3月15日	ニューギニア島マリソ
利根川 生三	昭和9年3月	昭和20年9月17日	戦病死
渡辺 巖	昭和9年3月	昭和20年6月25日	ビルマ 戦病死
石川 正彦	昭和10年3月	昭和19年10月16日	戦病死
大城 鶴彦	昭和10年3月		戦病死
小保内 宮道	昭和10年3月	昭和15年	
巖間沢 正三	昭和10年3月	昭和19年12月6日	
杉野 敏克	昭和10年3月		
高橋 健	昭和10年3月	昭和18年7月6日	ガダルカナル島
多田 正男	昭和10年3月	昭和19年3月16日	
太刀川 越男	昭和10年3月		戦病死
新沼 康司	昭和10年3月	昭和20年5月18日	ビルマ
水野 恒三郎	昭和10年3月	昭和19年4月	サイパン島
箕浦 精信	昭和10年3月	昭和17年10月2日	陸軍軍医中尉 宇都宮陸軍病院にて戦病死
吉村 一男	昭和10年3月	昭和19年9月8日	
荒川 鬼怒彦	昭和11年3月		
石井 策郎	昭和11年3月	昭和20年8月24日	ニューギニア・サルミ 戦病死
加藤 呉郎	昭和11年3月		
鎌田 豊	昭和11年3月		
櫻井 三郎	昭和11年3月		
中村 義平	昭和11年3月	昭和20年5月25日	
福原 平	昭和11年3月		
山中 正三	昭和11年3月		
吉田 幸世	昭和11年3月	昭和19年	南洋ロタ島
渡辺 平吉	昭和11年3月	昭和14年12月18日	
伊藤 眞	昭和12年3月	昭和14年8月27日	ノモンハン
岡田 正二	昭和12年3月		
小原 浩	昭和12年3月		
鎌田 善一	昭和12年3月	昭和20年8月	
桑野 智信	昭和12年3月	昭和20年5月15日	レイテ島
古明地 勝也	昭和12年3月	昭和19年7月9日	
鈴木 新	昭和12年3月		戦病死
嵩 三郎	昭和12年3月	昭和18年1月16日	北支 戦病死
鶴見 信仁	昭和12年3月	昭和18年	
友松 迪	昭和12年3月	昭和19年7月10日	
畑 幾穂	昭和12年3月		
福島 俊三	昭和12年3月	昭和19年12月25日	レイテ島
福永 行蔵	昭和12年3月	昭和20年	
星原 才三	昭和12年3月		
村里 榮一	昭和12年3月	昭和20年12月31日	
若井 正良	昭和12年3月		
大森 三郎	昭和13年3月	昭和17年	
岡 彌一郎	昭和13年3月	昭和19年6月28日	
河野 正則	昭和13年3月		
北野 健治	昭和13年3月	昭和19年	
木村 新	昭和13年3月	昭和20年8月1日	ルソン島イボウ地
熊谷 毅	昭和13年3月	昭和20年6月3日	ルソン島マニラ東方
坂本 正男	昭和13年3月	昭和20年7月24日	比島マニラ東北地区
關口 喜右エ門	昭和13年3月		
外山 忠治	昭和13年3月		
長岡 忠治	昭和13年3月	昭和19年7月18日	マリアナ島
三宅 正五郎	昭和13年3月	昭和17年7月16日	戦病死
安江 茂夫	昭和13年3月		
吉野 平一	昭和13年3月		ガダルカナル島

氏名	卒業年月	死亡年月日	
小野寺 順	昭和14年3月		
工藤 正三郎	昭和14年3月		ルソン島
河野 壽	昭和14年3月		戦病死
佐藤 恭	昭和14年3月	昭和18年7月6日	ガダルカナル島
庄司 良三	昭和14年3月	昭和19年6月1日	
田中 穰	昭和14年3月	昭和18年9月	戦病死
坪井 常晴	昭和14年3月		
野上 純	昭和14年3月		バブアニューギニア・アイタベ
野呂 貞淳	昭和14年3月		戦病死
矢野 正	昭和14年3月		ルソン島
遊佐 忠伍	昭和14年3月	昭和21年3月26日	シベリア抑留中戦病死
石川 忠男	昭和15年3月		
荏原 誠之	昭和15年3月		
片平 勝彦	昭和15年3月		
加藤 勝	昭和15年3月		
近藤 徹男	昭和15年3月		
下館 新一	昭和15年3月		
千葉 英一	昭和15年3月		
波多野 孜	昭和15年3月		
鮎川 一行	昭和16年3月		
石井 正	昭和16年3月		
小澤 重男	昭和16年3月		戦病死
加藤 勇	昭和16年3月		
島田 三矩	昭和16年3月	昭和19年4月21日	
十川 源蔵	昭和16年3月	昭和18年1月20日	
土岐 東一	昭和16年3月	昭和21年5月9日	
中村 泰三	昭和16年3月	昭和18年9月10日	
井上 啓	昭和16年12月	昭和19年2月24日	マーシャル諸島ブラウン島
井村 辰英	昭和16年12月	昭和19年9月27日	中華民国湖北省嘉魚
伊良子 光知	昭和16年12月	昭和27年3月18日	戦病死
植野 義夫	昭和16年12月	昭和20年6月20日	沖縄本島摩文仁
尾形 敏雄	昭和16年12月	昭和22年10月30日	ソ連タタール自治共和国エラブカ第97收容所
小澤 道成	昭和16年12月	昭和19年12月27日	ニューギニア島マリソ
風間 成一	昭和16年12月	昭和20年7月17日	レイテ島ビリヤバ
管 仁一	昭和16年12月	昭和19年11月17日	済州方面
齋藤 正雄	昭和16年12月	昭和20年2月14日	満州国興安省
島田 儀助	昭和16年12月	昭和19年3月7日	フィリピンレイテ島ブラウエン飛行場
杉浦 敏幸	昭和16年12月	昭和18年1月6日	アリユーション列島
鈴木 敏次	昭和16年12月	昭和19年9月13日	
高橋 壽	昭和16年12月	昭和20年2月14日	仏領印度支那
新垣 寛保	昭和16年12月	昭和20年5月13日	沖縄南風原村新川
野澤 正之	昭和16年12月	昭和20年6月2日	ニューギニアビアク島
長谷川 義之助	昭和16年12月	昭和20年6月18日	沖縄本島真栄千
蜂谷 富男	昭和16年12月		満州
晴山 静	昭和16年12月	昭和18年5月29日	アッツ島
古川 正直	昭和16年12月		ニューギニア ガリ島
松本 兼一	昭和16年12月	昭和19年10月25日	北太平洋方面
池田 修	昭和17年9月		
石川 駿一	昭和17年9月	昭和20年6月	レルリン島ネベビスカ州サリナス
磯山 誠	昭和17年9月	昭和20年7月	
大森 信一	昭和17年9月	昭和19年4月5日	ブーゲンビル島タロキナ
神居 正三郎	昭和17年9月	昭和19年4月25日	ニューギニア島アイタベ
神崎 平二	昭和17年9月		
北神 孫一	昭和17年9月		
木村 薫	昭和17年9月		戦病死
白川 忠	昭和17年9月		
菅原 莞爾	昭和17年9月		
菅原 春雄	昭和17年9月	昭和19年9月18日	
関村 定四郎	昭和17年9月	昭和20年5月15日	
丹野 洋治	昭和17年9月		
寺戸 定世	昭和17年9月	昭和20年7月	
福井 弘	昭和17年9月		
堀内 欣一	昭和17年9月	昭和19年7月8日	
山内 彌	昭和17年9月		
綿引 正	昭和17年9月	昭和19年9月7日	
安達 龍一	昭和18年8月		
阿部 英次	昭和18年8月		
井上 一信	昭和18年8月		戦病死
菊田 芳雄	昭和18年8月	昭和18年10月	
楠 隆雄	昭和18年8月		比島マニラ
熊谷 貴	昭和18年8月	昭和20年7月17日	レイテ島ビリヤバ
桑嶋 正逸	昭和18年8月		
桑原 庄一	昭和18年8月		
田崎 器正	昭和18年8月		
蛭田 秀雄	昭和18年8月		
幸地 哲郎	昭和19年9月		
瀬戸 武夫	昭和19年9月		

『圭陵会会員名簿2017』より

# 「岩手病院建築図」辰野葛西事務所

その4 現1号館



図面番号【第六号】3階演壇詳細図、3階3連窓詳細、一般出入口詳細、講堂、2階礼拝堂出入口詳細